



第18回有機農業公開セミナー in 東京 食と農の未来を考える リポート

去る2月5日、國學院大學5号館5202教室（東京都渋谷区）において、第18回有機農業公開セミナー（主催・NPO法人有機農業参入促進協議会（有機農業参入促進協議会、後援・農林水産省、渋谷・環境と文化の会、次代の農と食を創る会）が開催されました。本セミナーは、昨年11月に急逝した故山下一穂氏（有参協前代表理事）の「これからの有機農業を皆で考えたい」という趣旨により始まりました。

平日の開催でしたが、参加者は約200名で、農業関係者や行政機関、民間企業、学生など多方面からの参集がありました。

セミナーでは農業経済学の専門である生源寺眞一教授（農学博士、東京大学名誉教授、公益財団法人生協総合研究所理事長、認定NPO法人樹恩ネットワーク会長、特定非営利活動法人中山間地域フォーラム会長、地域農政未来塾塾長など）より、日本の食と農のあゆみ、今後の農業の展望について基調講演がありました。その後、パネラー4名が日頃の取り組みや農業に対する思い、今後の抱負を発表

して、これからの日本農業の中で土づくりを第一とする有機農業の果たす役割を考える場が提供されました。本報では当日の講演内容を要約してお届けします。

基調講演

「食と農の未来を考える

——新潮流と変わらぬ本質——

生源寺眞一教授

近年、食や農の問題に食料自給率の低下や食生活の変化、農業の担い手不足などが挙げられ、その現状が消費者の食の安全や環境保全への関心を高めました。加えて非農家出身者の雇用就農や企業型の新規参入者、新規定年帰農者が増えて、農業が職業としての雇用創出になった結果、健康寿命延伸によって中山間地域の耕作放棄防止の役割を担う人材の確保にも繋がっていることなどを解説しました。

さらに、「これからの農業者、農村に求められる課題のひとつに、取引先との交渉力をつけることや農村社会に移住する多様な人材との共同行動が求められる時代になるが、農業者が食品

産業にウイングをひろげて良好なつながりをもつことは、消費者にさらに接近する農業になる。また農村で風通しのよいコミュニティを形成することは内部から革新的な試みが生まれ、次代の日本社会を支える基盤のひとつになる」と農業関係者を激励する講演内容でした。

事例発表

千葉康伸氏（NORA）農楽（代表）は山下一穂氏の農園で2年間研修をした後、2010年に神奈川県愛甲郡愛川町で新規就農しました。研修当時、山下農園で緑肥やEM生ゴミ堆肥、雑草などをすき込んで「畑をまるごと発酵」する土づくりの方法に感銘をうけて、就農先の黒ボク土でどう活かせるかを試しました。その結果、緑肥やムギを常に栽培して畑を裸地にしないことが生物の多様性を高め、かつ土の物理性、化学性、生物性がよくなつて品質のよい野菜が育つことを実感しました。

有機の土づくりで学んだことは、野菜を育てているのは自然や土であり、栽培者はその環境を整えることであり、決して



生源寺眞一教授の基調講演

主体ではないことです。今後、社会が明るくなる仕組みづくりに貢献できる有機農業を次の世代に残していきたいという報告でした。

井村辰二郎氏（株）金沢大地代表）は石川県金沢市で生まれ育った農家の5代目であり、30歳を過ぎて新規就農した際に、有機農業にこれからの農業の可能性を感じて取り組みました。様々な地球問題が心配される中で、ミッションは循環型社会を農家の立場でどう実現するかであり、地域で何ができるかを考えながらも世界に向けてアクションを起こしたいという思いを話しました。現在までに井村さんが挙げている成果は、富山県の採卵農家の鶏糞と自社の



パネルディスカッションの様子
左からコーディネーターの大江正章氏、基調講演を行った生源寺眞一教授、事例発表の千葉康伸氏・井村辰二郎氏・武藤一夫氏・吉野隆子氏

本セミナーの資料は有参協 HP (http://yuki-hajimeru.net/?page_id=595) よりダウンロードできますので、ご参照ください。

もみ殻を原料にした乾燥発酵鶏糞を用いて20年間で全国の耕作放棄地面積の0・03%を開墾したこと、土地利用型作物を120ha経営し、国内の有機大豆生産量の12%を賄っているという報告でした。

武藤一夫氏（NPO法人ゆるぎの里東和ふるさとづくり協議会理事長）の村づくりの動機は、市町村合併や農協合併が進められた中で、二本松市東和地域の農業の衰退を危惧した地域の青年農業者の呼びかけによるものでした。以前より個々に活動していた農業者団体、市民団体などを統合し、約200名の会員による「ゆるぎの里東和」が平成17年4月に設立されました。福島は原発事故から8年経過した今も風評被害があるようですが、武藤氏はじめ会員は、有機・慣行問わずに「農家皆で畑と環境を守ることで里山農業」との意識を共有し、会員の独自ブランドを築き、6次産業化するために、桑の産地であることと里山農業の強みを活かした特産加工やわらび栽培、ワインづくりに取り組んでいます。さらにグリーンツーリズムを通して、生き方を農業に求めてくる方々に地域の良さや風習、考え方を学んでもらって定住を決めた方には住居と畑を斡旋する活動に尽力しています。先代が培ってきたことを受け継ぎ、いかにして若い人にバトンタッチできるか

が、有機（的つながり）の里づくりであるという志を述べました。

吉野隆子氏（オーガニックファーマーズ名古屋代表）は朝市村を2004年10月23日から月2回で始めました。きっかけは、2002年当時に名古屋市が、市中心部にある都市公園「オアシス21」がにぎわうような公園の名物を作りたいという要望と、特に中山間地域の有機農家と都市の消費者をつなぐ販路を作りたい吉野氏の願いがマッチしたことでした。現在、この朝市村は毎週土曜日朝8時30分から11時30分の開催で、出店する農家は新規就農者でオーガニックであること、生産者自身が栽培したもの、加温栽培なしの旬の野菜であることです。吉野氏は有機を消費者の「日常」にすることを願いと、さらに朝市村を有機農家と都市の消費者が交流する場、有機で新規就農希望者の相談と就農後のサポート（販路開拓・マッチング）の場、有機農家どうしが切磋琢磨する場になるよう尽力しています。その成果として、朝市に係わって就農した方が就農先の地域で

新しい力になり、さらにその人から新たに有機を志す就農者が増えているという報告でした。

◆ 事例報告のあとのパネルディスカッションで、生源寺教授は「有機を志す方の多くは自身で栽培と経営の研究をし、さらには幅広くコミュニケーションをとることが普通であるように感じられて、日本農業の将来を拓く可能性が高い」とパネラー4名の活動を高く評価しました。

セミナーの最後は、コーディネーターの大江正章氏（コムンズ代表、ジャーナリスト）が「自治体の有機への関心は高まってきており、千葉県いすみ市や福井県池田町など、元気な地域のほとんどは有機農業がならからの形で関与している。ただし、我々は有機農業だけが良くなればよいと思っていない。日本農業全体が元気になることが一番大切であり、そのフラッグシップの一つとして有機農業があるのではないかと語り、有機農業が食と農の未来に希望をもたらずであろうと締めくくりました。

（技術普及課 安野 博健）